

令和6年(2024)5月30日

合同会社イノベーション戦略実践機構:代表社員 末岡 武彦

BIS 第 186 回情報研究会「音楽の健康効果」に関する受講感想

当研究会では、ノルウェー・ベルゲン大学 ステファン・ケルシュ教授、ドイツ在住のバイオリン奏者・齋藤・アンジュ玉藻氏、声楽家・松本 貴子・マリア氏がそれぞれの立場で演奏も交えながら、音楽と健康効果についての講演を行った。小生としても南麻布純音楽・アート研究会を通じて人が聴いて感動する事を目的とした「純音楽」を提供する立場なので、「感動」と「健康」との関係と言う事で、大きな関心を以て参加しました。

以前、植物にモーツァルトの音楽を継続的に聴かせた所、一層順調に育ったが、ハードロックを聴かせ続けた所、枯れてしまったなどと言う話を聞いた事がある。更に最近では世阿弥の「風姿花伝」をパフォーマンス・アートの総合理論書として精読しているが、その「奥儀讚歎云」に「芸能とは諸人の心を和らげて、上下の感をなさむこと、寿福増長の基、遐齡延年の法なるべし。」とある。既に我が国では15世紀初頭、応永9年(1402)には、パフォーマンス・アートの経済効果のみならず、社会幸福効果・長寿延命効果を理解している人がいたと言う事だろう。

先ず、ケルシュ教授がご自身の科学的研究成果を基に、他の動物とは、異なる音楽の社会的効果について、論じられた。会場で皆さんと唱いながら、音楽を一緒に行う集団性の大切さを実証実験した。これは簡単であるけれども理解促進には効果があると思った。人はリズム・和声・旋律の規則性を把握して、音楽の成り行きを予測すると言う。一緒に音楽を行う事で、集団・社会に於ける団結性・一体感を形成するのみならず、各個人が幸せを感じ、健康になると言うものだ。文明から閉ざされたアフリカの部族に、クラシックを聴かせても視聴者は幸せを感じたと言う。正に音楽の普遍的効果を示したものだだろう。健康面では、アルツハイマーの治療・痛みの緩和にも役立つ事を示す実証実験もされており、会場からも多くの質問があり、経験談を話す人も現れた。

バイオリニストの齋藤さんの無伴奏バイオリン楽曲、バッハのシャコンヌの演奏は世界的にも好評・定番になっていると言う。ソロ演奏の神経を集中させて表現力豊かに、会場と一体となって感動を共有する事のみならず、脳科学との関係も研究されていると言う。他にも能登半島被災者への鎮魂のための歌もバイオリン・ソロで演奏した。ソロ楽器と言うと便利なピアノを中心とする鍵盤楽器が目されるが、他の楽器だってそれぞれ面白いはずだ。ソロ楽器としてのバイオリンも踏まえて、齋藤さんの一層のご活躍を期待したい。

声楽家の松本さんも、講演し、超高周波の健康効果を強調された。日本語の音域は、他言語と比べて、低い。和楽器は超高周波を発生させるし、祝詞や声明も同様なのだと言う。一方、西洋楽器は正規化され過ぎて超高周波は発生しにくいそうだ。松本さんもご自身でヴィブラートを効かせた歌を聴かせて皆様で背中を向けてその効果を感じたのは面白かった。超高周波の健康効果の研究については今後も注目したいものだ。

最後に皆様で、「浜辺の歌」を大合唱。皆様で幸せを共有してセミナーは終了しました。音楽の健康効果の研究や関連商品・サービスは既に色々なものもあるし、医大などの研究機関でも実証研究を行っている様だ。今後はどんなタイプの音楽が健康効果抜群なのか、逆にどんな音楽に逆効果があるのかのどが分かって行くと有意義だと思う。音楽創作行為そのものとの関係も重大関心事だ。 以上